

報恩講

しんらんしょうにん
親鸞聖人の恩徳に報謝する法要で、浄土真宗において最も重要な年中行事とされる。本願寺では毎年1月9日から、親鸞聖人の祥月命日である16日まで七昼夜営まれる。一般寺院や門信徒の自宅でも勤められ、本願寺に先立って営む地域などでは引上会、御取越などとも呼ばれる。

奥野 寛暢

いただくからこそ開かれる……………1

豊田 真理沙

つながりの中で……………11

武田 智光

『歎異抄』と出会うまでの縁……………21

北塔 光昇

報恩と報恩講……………31

本文中、『註釈版聖典』の引用は「第二版」を用いています。

表紙絵／森長あやみ

挿絵／森長あやみ、豊田真理沙

いただくからこそ開かれる

奥野 寛暢

人の欲望・煩惱は手の動きに似ていると教えていただいたことがあります。何も持っていないと欲しくなり、いったん手の中に握ってしまうと離せなくなります。そして、握ったものを失うと、心が、悲しい、悔しい、腹立たしい、恐ろしいなどの負の感情に支配されるのです（そもそも「失」とは、手の中のものなくなるといふ形から生まれた漢字だそうです）。

このことをお釈迦さまは「苦」と示され、その原因である煩惱を「ン

トロールすることが苦悩から解放される道だとお説きになりました。つまり、手放すことができれば苦しまなくてもよくなるということなのですが、これが相当に難しいのです。

以前、お寺の報恩講のご法話で次のようなお話を聞かせていただきました。

あるお寺の子ども会でのことだそうです。その日、子どもたちは朝からゲームなどをして遊んでいました。午前十時頃、そこへ住職さんが大きな瓶びんを抱えて現れました。瓶の中にはあふればかりに飴玉が入っています。

「ああ、おやつだぞ。みんな休憩にしよう。集まれえ」

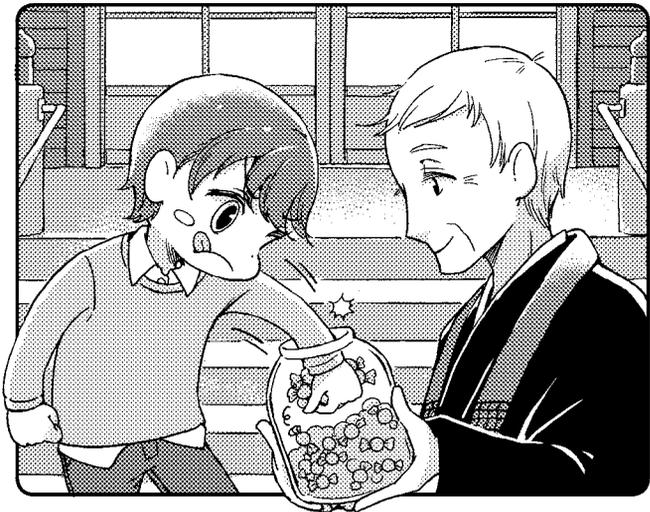
と住職さんが大声で呼びかけると、子どもたちは我先に走ってきて、住職さんの前に並びました。一番前に並んだ男の子は誇らしげな笑顔で住職さんを見つめています。

「ぼつやが一番かい。よし、では好きなだけ取りなせう」と言って、飴玉の瓶を男の子の前に差し出しました。

「え？ どれだけ取ってもいいの？」
と、男の子が問いかけるよ、

「ああ、ううむ」

と、住職さんはさらに瓶を男の子へ向けながら答えました。男の子は目を輝かせて、手を瓶の中に入れました。なるべくいっぱい取ろうと手のひらを大きく開けて、つかめるだけの飴玉を握りしめると、瓶から手を



出そうとしました。しかし、瓶から手は出ません。おかしいなと思って力いっぱい引き抜こうとしますが、やっぱり手は出ません。それもそのはず。この瓶の口は絶妙な大きさで、二、三粒をそっと取ると手が出るのですが、手をグーにして握るとつかえて手が出なくなるのです。どれだけががんばっても手が出ない男の子を、見るに見かねて住職さんが言いました。

「ぼうや、そんなにたくさん握ったから手が出ないんじゃないのか？
ちよつと離したらどうだ？」

「いやだよ！ だって好きなだけ取っていいって言ったもん。出るま
でがんばる！」

「そうかあ。なら、やってみるか！」

そう言うと、瓶を押さえる住職さんと男の子とが、綱引きのように引
つ張りつこを始めました。しかし、結果は同じことで、しばらくすると
男の子は泣き出しました。

「しかたないなあ。じゃあ、握ったのと同じだけ飴ちゃんあげるから、
手を離してみようか」

住職さんに促されるまま、握った飴玉を離すとスツと手が出ました。